

在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用 — 留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合 —

高濱 愛 (静岡大学国際交流センター) / 田中 共子 (岡山大学社会文化科学研究科)

【要旨】

留学準備教育として、米国留学予定の日本人学生を対象にアメリカン・ソーシャルスキルの学習セッションを実施する一連の研究の一つとして、本研究ではその留学期間中の効果を検討した。面接法と質問紙法を用い、学んだスキルが実際に留学先で発揮されたか、そして適応に有益だったかを探った。留学初期(3～4ヶ月経過)にあるスキル人為学習者(セッション参加者)と、留学初期および留学期中期(6～7ヶ月経過)にある自然学習者(セッション非参加者)の留学生を対比した。滞在初期・人為学習者は、学習したスキル発揮の心構えと認知・行動的スキルを積極的に実践していた。彼らはサポート獲得の可能性が高まることで適応に有利と考えられた。

【キーワード】

ソーシャルスキル、日本人留学生、アメリカ留学、留学準備教育、心理教育的セッション

I. はじめに

日本人留学者の半数以上が米国に留学している現在、米国という異文化における彼らの適応を実証的に把握し、教育的課題を読み解き、対応する教育策を案出していくことは、留学生教育の重要なテーマの一つと考えられる。Takahama, Nishimura and Tanaka (2008)では、在米日本人留学生にとって、留学先である米国の文化・社会に適したソーシャルスキルを使用することが、彼らの異文化適応に肯定的な影響をもたらす可能性があるとして指摘されている。この効果を積極的に求めるため、先に我々は、米国留学を数ヶ月後に控えた日本人学生を対象に、アメリカン・ソーシャルスキルを学ぶ心理教育的セッションの提供を試みた(田中・高濱,2008)。ソーシャルスキルとは、対人行動の技能を意味し、ものの見方や考え方、振る舞い方を含んだ、人付き合いの流儀といえる。それは文化圏ごとに異なるため、異文化滞在に先駆けて、当該社会で用いられるソーシャルスキルを学んでおくことは、適応に有益と考えられる(Furnham&Bochner,1986)。留学準備教育として実施された我々のセッションに参加した学習者は、積極的に自分から話しかけて相手を誘ったり頼みごとをしたりするといった要領が分かって友人作りに対する心配が減ったと語り、留学する実感がわいた、アメリカ人と交流する意欲が高まった、自信がついた、などと感情面での好転を述べた。そしてロールプレイを組み込んだ学習を通じて、自らのパフォーマンスが向上した実感を得ていた。助言者役としてセッションに参加したネイティブの学生は、パフォーマンスの上達を指摘し、アメリ

カ人との交流に十分使えると評価しており、文化的妥当性が確かめられた。すなわち主観評価と他者評価の観点から、学習の効果が示された。しかしこれは、準備教育としての手応えを、セッション中の変化を捉えることによって示したものであり、実際の留学中の効果は、この段階では未知数である。

本研究では、セッションで学んだスキルが、実際に留学先で発揮されたのかどうか、それは適応に有益だったのかどうかを探るためのパイロット・スタディとして、留学中の学生を対象とした調査を実施した。調査では面接法と質問紙法を併用し、米国留学中のソーシャルスキルの使用について明らかにすることを中心に、留學生活の様子を調べていった。ソーシャルスキルは、滞在先文化における対人行動の様式であるため、滞在体験が長びけば、次第に身に付いていく面があると予想される。しかし我々の受講生は、いわゆる「短期留学生」のため、留学期間は一年足らずしかない。彼らが受講によって、少しでも有益に時を過ごせるのか見極めたい。今回はセッションで学習した人為学習者のスキル発揮に焦点を当てて、彼らの考え方や行動の軌跡を見て、実際に得た反応や当該状況における行動パターンの把握を試みた。また別の対応パターンが見られるかどうか注目するため、セッションを経ずに自らの体験のみを通じて学んだ自然学習者の事例を参照した。例えば、スキルは人為的に学習すれば、より速く、うまく発揮できるのか。新しいスキルに早く気づいたり、速く習得したりできるのか。受講によって、不適応の軽減や適応の促進を期待できるのか。自然学習に任せた場合、時間が経つと、スキルはどの程度身に付くのかも知りたい。こうした問いへの答えを、留學初期や留學中期における自然学習群、留學初期の人為的学習群の様子から、探ってみようと考えた。つまり、本研究の目的は、理論的に異文化適応への効果が期待されてきたスキル学習に対して、学習セッションを実際に行い、縦断調査を行う介入研究として、留學後に学習がどう生かされていたかを事例的に探ることである。なお、本研究はパイロット・スタディであるため、事例としての情報呈示をねらいとしており、得られた結果を早急に一般化することを目的とするものではない。

II. 方法

1. 調査手続き

2007年11月から12月、アメリカ留学中の日本人留学生10名を現地に訪ね、質問紙調査と一人1時間程度の半構造化面接を実施した。質問紙では、同年夏に実施したアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションで扱った次の8スキルについて、表1の通り、実施の有無、実施状況、その時の気持ち等を、自由記述してもらった：スキル1・笑顔、アイコンタクト、聞く態度、スキル2・初対面の相手に挨拶する、スキル3・友人を作る、スキル4・先生に質問や相談に行く、スキル5・授業で自分の意見を言う、スキル6・先生に要求を伝える、スキル7・主張や交渉をする、スキル8・依頼された援助を断る。面接は、個室や喫茶店など落ち着いて話せるところで行った。U4とU5は本人らの希望により二人一緒であったが、他は全て一人ずつ面接を行った。

表1 質問紙におけるスキル関連項目

<S群用>学習したスキルの使用について

留学準備のための学習セッションでは、以下の8つのソーシャルスキルを取り上げました。あなたは留学中にこれらのスキルを使いましたか？セッションに出席した回のスキルは「習った」、欠席した回のスキルは「習っていない」に○をしてから、お答え下さい。

(1) 自己紹介(笑顔、アイコンタクト、聞く態度)のスキルを(習った・習っていない)

①使った→いつ/誰に/どこで/スキルのどの部分を/その結果・効果/そのときのあなたの気持ち

②使わなかった→その理由

(以下、(2)～(8)のスキルについても同様に尋ねた。)

<N群・U群用>アメリカでの人付き合いの要領について

あなたは留学中に、次のような場面があったとき、どのように対応しましたか/していますか？考え方や判断の仕方、行動の仕方などの概略を教えてください。まだこのような場面に対応したことがなければ、「まだしたことがない」に○をつけて、その理由があれば書いてください。

(1)「自己紹介する」ときは

→いつ/誰に/どこで/要領のどの部分を/その結果・効果/そのときのあなたの気持ち

()まだしたことがない(理由:)

(以下、(2)～(8)のスキルについても同様に尋ねた。)

続いて面接では、上記の(1)から(8)のスキルを挙げて、使用のエピソードを具体的に聞いた。スキルの内容、使用の頻度、文脈、反応、感触は、詳しく尋ねた。そしてホストとの交流、留学生活の概略と感想を語ってもらった。語りは許可を得て録音し、書き起こしを作成して分析に用いた。面接者は本稿の第一著者であった。

2. 調査協力者

20代前半の在米日本人留学生10名(表2)。日本では全員、文系学部所属の学生で、短期交換留学プログラムを利用して留学していた。みな留学先の大学によって、留学に十分な英語力の持ち主と判断されていた。彼らは滞在期間とスキル学習方法の組み合わせから、以下の3通りに分けられる。

表2 調査協力者の属性

| | S2 | S3 | S6 | N1 | N2 | N3 | U1 | U2 | U4 | U5 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 性別 | 女 | 女 | 女 | 女 | 女 | 男 | 男 | 女 | 女 | 男 |
| 学年 | 3 | 3 | 4 | 5 | 3 | 4 | 3 | 4 | 2 | 2 |
| 留学先 | A大学 | A大学 | B大学 | C大学 | D大学 | D大学 | A大学 | A大学 | C大学 | C大学 |

注：N1の「5年」は、卒業を延期して留学していたことを指す。

①S群—滞在初期・スキル人為的学習者3名(S2、S3、S6) 2007年6月から7月、アメリカ留学前に我々のソーシャルスキル学習セッションに参加し、8つのスキル(合計12時間分)を全て学んでから渡米した。セッションは、スキル発揮が期待される課題場面が呈示され、フィードバックや助言を得ながら役割演技を繰り返すものであった(詳細は田中・高濱,2008を参照)。調査時点で留学後3ヶ月から4ヶ月程度が経過していた。②N群—滞在中期・スキル自然学習者3名(N1、N2、N3) S群と同大学に在籍しているが、留学出発時期が数ヶ月早く、学習セッションには参加していない。渡航後半年から7ヶ月ほど経過していた。スキルは、経験を通じて自力で自然学習したと考えられる。③U群—滞在初期・スキル自然学習者4名(U1、U2、U4、U5) S群やN群とは異なる大学の在籍者で、調査時点で留学後3ヶ月から4ヶ月程度を経過していた。学習セッションの参加の機会はなく、上記のN群と同様、スキルの自然学習者とみなせる。

住環境については、S6とN1のみ学外に住み、他は大学の寮で生活していた。日本での住環境は、N3が1人暮らしをしていた以外は、親元から大学へ通学していた。留学先での授業履修については、1日に1クラス程度であり、合計週5クラス程度であった。過去の海外滞在経験については、U4とU5に1年以上の米国滞在経験があるが、他は1ヵ月超の海外滞在者はいない。なお上記以外、完全な回答が得られなかった留学生3名と、日本以外からの留学生1名の調査協力も得たが、その情報は今回の分析対象から除外した。

3. 分析方法

質問紙への記述から、スキルの使用状況をまとめた。続いて語りの中から、S群が参加したアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションで扱ったスキルに対応させて、留学先でのスキル発揮に該当するエピソードを抜き出した。その語り部分を、認知・感情・行動の各面に応じて整理した上で、会話体のままに、エピソードごとにかぎ括弧で区切りながら呈示した。そしてセッションで扱ったスキルを使ったというエピソードを抜き出し、それが本人に有益な結果をもたらした場合、あるいは対人的な援助の獲得につながっている場合には、適応を支援しているとみなした。さらに以下の観点から、語りを比較していった。①S群とU群：共に滞在初期だが、セッション受講を経たS群の方が、スキルを使っているか。②S群とN群：セッションを受講した滞在初期のS群は、同大学在籍で滞在がすでに中期のN群と、同じ程度にスキルを実施しているか。③N群とU群：滞在初期より中期で、スキルの自然学習が進んでいるか。

Ⅲ. 結果と考察

1. スキルの使用状況

質問紙における、スキル使用エピソードの記述の有無から集計した、各群のスキル使用状況を表3に示す。なおS2は、スキル3の使用なし、と記していたが、面接では使用に該当する語りがみられたため、使用あり、と判断した。スキル1～4の比較的易しいスキルは、全群で頻繁に使われ

ていた。しかしスキル5～8の難易度の高いスキルとなると、滞在中期にあたるN群では使用エピソードがみられるが、滞在初期のS群やU群では、使用エピソードが比較的少ない。初期にはスキル1～4、中期には加えてスキル5～6の学習が起きやすいと考えられ、スキルの学習は時期を追って進むことが示唆される。スキルの人為的学習者において、スキルの発揮時期が早まったり、より盛んになる証左は得られていない。

表3 S群・N群・U群における8つのソーシャルスキルの使用者・不使用者の数⁽¹⁾

| 群 | S (N=3) | | | N (N=3) | | | N (N=4) | | |
|------|---------|------|-----|---------|------|-----|---------|------|-----|
| | 使用者 | 不使用者 | 無回答 | 使用者 | 不使用者 | 無回答 | 使用者 | 不使用者 | 無回答 |
| スキル1 | 3 | 0 | - | 3 | 0 | - | 4 | 0 | - |
| スキル2 | 3 | 0 | - | 3 | 0 | - | 4 | 0 | - |
| スキル3 | 2 | 1 | - | 3 | 0 | - | 4 | 0 | - |
| スキル4 | 3 | 0 | - | 3 | 0 | - | 3 | 1 | - |
| スキル5 | 1 | 1 | 1 | 3 | 0 | - | 2 | 2 | - |
| スキル6 | 0 | 2 | 1 | 3 | 0 | - | 2 | 2 | - |
| スキル7 | 2 | 1 | - | 2 | 1 | - | 1 | 3 | - |
| スキル8 | 1 | 2 | - | 2 | 0 | 1 | 3 | 0 | 1 |

2. スキル実施の詳細

スキル実施の詳細を、留学生の語りからたどっていく⁽²⁾。なお()内は筆者による補足、・・・は中略を意味する。調査対象者のプライバシーに関わる個所は、語りの趣旨を損なわない程度に修正した。語りの合間の間投詞などは、適宜省略した。以下、先に分析結果を示し、次にそれに関する語りを示す。まず、渡米後初期の数ヶ月間がつかつたとする語りは、全群において見られる。海外滞在経験を持つU4も、初期の困難を語っている。

<S2> 「時々はどうしても家族と喋りたいなあという時があったりして、そういうのってうまくいってない時とかなんで、・・・浮き沈みはやっぱ最初は激しかったですね。」

<N2> 「最初の学期はそれがほんとに寂しすぎて、辛かったですけど。」

<U4> 「和食と、家族と友達にすごく会いたい」「とりあえず日本帰りたいな」

初期の困難を経た後、自ら問題解決しようと決意し、次第に克服に向けて動き出す傾向は、共通してみられる。彼らは共に、異文化適応の過程を辿っていると解せる。

<S2> 「でも結局この(寮の)部屋から出なくて、閉じこもってたら、英語は上達しないし、・・・悩みがあるんだよって、日本の友達とかと喋ってたら、結局日本にいる生活と変わらなくて。結局、自分次第。自分がどうにかしないと変わらないってことに気づいたのが大きかったです」

ね。」「(問題解決するには) やっぱ誰かに相談することですかね。・・・結局自分で解決方法が見いだせない場合は、人の意見を聞いて、それをまねする・・・。」

<S6>「友達だって自然にできるだろうと思ったらできないし、自分から動かない限り何もできない。」「英語が、できないのは当たり前で。・・・何回も同じことを言える根性っていうか、・・・できないなりに、自分でやらなきゃいけないと思うし。気にしすぎちゃダメだけど、諦めないことが大切だなんて思いますね。」

<N1>「(問題解決するには) 働きかけまくるっていうか、困った時にいろんな人に聞いたりとか、・・・いっぱい助けを求めたり。」

<N3>「(友達を作るために) 絶対声掛けるようにしてるんですよ、自分から、ハイって。」「つらい思いしてもいいから、とりあえず自分の意見言ったり、要は何でも積極的に取り組むっていう感じですかね。」

<U1>「自分だけで悩むよりも、いろんな人に相談する方がいいですよ。相談相手を見つけられればきっと。日本人でも。・・・人に相談することで解決策って見つかると思うんで。ためらわないで。」

スキルを発揮し、留學生活を楽しむ語りは、各群に見られるようになっていく。しかし困難の程度や期間、解決のための方略を子細にみた場合、以下の三点においてS群の者と、N群・U群の者は、微妙に異なっているように思われる。

第一に、留學初期の困難に際して、S3は現地での新たな人間関係に盛んに働きかける。S3でも資源の獲得は簡単ではないが、あきらめずに働きかけを続けるため、対人的な援助資源の獲得につながっていくものと予想される。しかしU2、U5では、自然発生的な援助資源に頼り、現地での資源が希薄になりがちのようである。日本人に助けを求めたり、自分一人で対応する語りが目立つ。彼らは、困ったときは現地のアメリカ人ではなく、日本人の学生や日本の家族に相談していた。

<S3> 働きかけを続け、支援を得ることについて：「留学生だから、話しかけても・・・あっち行ってみたい。そういう風には言わないけど、そういう感じでされるときもあるんですよ・・・でもそういう人がいても、そういう人もいるんだって、切り捨てて、他の人に・・・行くようにはしました。」「私が全然英語がしゃべれなくて、ほんとに全部みんなに助けられていたんですよ。」

<U2> 家族を相談相手とすることについて：「私はうちの家族にメールしてるんです。・・・愚痴っていうか、今日何があったとかっていうのを。・・・母に今日こうだったああだったって話すが・・・こっちだとできないじゃないですか。電話を毎回するわけにもいかない。やっぱりメールを(します)。今日こういうことがあったんだけど、それでこういう風に思ったとか、どうしたらいいかなっていう感じで相談する・・・自分の心の、今日溜まったものを吐き出す。やっぱりため込まない方がいいと思うので。そういう風にしてると、結構私はそれで、うまくいってる方だと思う

んです。」

<U 5>留学中のストレスについて：「日本人1人だったら、大変だったなって思います。
(同じ大学からの留学生が複数いて) 愚痴も聞いてもらえるし。」

現地の人との対人関係の構築に際して、S 2、S 3、S 6はセッションで学習したスキル、特に「スキル3：友人を作る」を積極的に使用している。さらに、「ポイント」(スキル発揮の要点)として学習した、友人作りの姿勢や心構えを意欲的に実践していることが確認される。彼らはこまめにかつ能動的に接触の機会を創出し、認知的・行動的に、積極的にスキル使用を心がけていたといえる。

<S 2>友達作りへの積極性について：「友達を作る、それって積極的になるってことなのかな。留学するって、・・・そこで暮らすってことですから、やっぱそこにいる人たちと仲良くならないと。ただ行くだけなら、誰でもできるから。たくさん友達を、それって一番簡単そうで結構難しいと思うんですよ。自分からいかないとダメだし。」

<S 3>友人作りの意欲について：「一人でいたら暗い気分とかになっていくじゃないですか。だから、友達がいたら楽しいし、いろんなところに一緒に言ったり、ご飯食べたりできるから友達を作る・・・。」「こっちに来たら、いろんな人に話しかけて、いろんな人と接したいなと思ったから、こっちの方が頑張ってます。」

<S 6>友人作りの機会を作ることにについて：「友達広げる意味でもバイトしようと思って。・・・自分から行こうかなって。」

一方N 1、N 3、U 2、U 4では、留学初期に関する語りで、関係性形成の迷いが頻繁に述べられる。N 1は、友人作りの方法自体が分からないと感じ、行き詰まりを抱えていた。周囲の人とのネットワーク作りが停滞してサポートも不足し、カウンセリングに行った。N 3は友人ができればめるまで時間を要し、U 2は深い友人がいないという。U 4は、会話を継続させる方法が分からず、困っていた。つまり彼らは、友人作りの要領を自力で発見せねばならないが、それには困難を経て、時間をかける必要があったようである。

<N 1>「(ルームメイトが日本語の堪能なアジア人だったため) 学校から帰ったら日本語ばかりしゃべって、あぁ何しに来たんだろうって思って。その時点であんまり友達もいなかったから、学校で英語を話す機会もあんまりなかったし。だから本当に人と話す機会もあんまりなかったし、・・・で、すぐくつらくて寂しかった。・・・カウンセリング受けてたんです、こっちに来てから。・・・週1でやってました。」「その時に、どうやって友達を作るのかが全然分からなくて。日本では友達も作ってたのに。ここに来て、友達がほしくても、どうやって会話を始めて、何を話し

て、じゃあその最初の挨拶終わったら何を話し続けたらいいのかとか、全然分からなくて。」「聞きたいことがあったし、でもその時に聞ける人がいなかった。友達どうやって作るのかとか、どんなことをこの学生が話すのかとか。そういうこと聞きたくても聞ける人が、友達がその時にいなくて、だから、すごい精神的にも悩んでたのがあって、カウンセリングに行っただけ。」

<N3>「最初の方は全然いなかったです。やっと半年くらい経ってから、信頼できるっていう人が、でき始めたって感じですね。」

<U2>「今でもすごい深い友達とかってのは、・・・多分ないと思う。」

<U4>「会話をつなぐのも、もともとのバックグラウンドが違うから、すぐ沈黙になっちゃうのも大変で。」

差の二つめは、N1、N2、N3、U1に比べて、S3の授業への関与が、渡航後の早い時期からわりと積極的なことである。S2・S3も満足のいくパフォーマンスができるには至っていないが、少なくとも発言しようと思ったり、S3は、「授業の終わりに話しかけに行ったり、分からないこともあるし、先生に聞きに行ったりすることもある」と述べているが、N2、U1は、(授業中の発言は)「難しい」と語り、実行していない。N1は、オフィスアワーには行かず、TA(授業補助者の院生)を訪ねたこともなく、分からないことがあっても、どこにも尋ねに行っていない。N3は、最初の学期の授業では、「何もしゃべれ」ず、「分かったふり」をしながら、「ずっと黙って座ってた」ため、「めちゃくちゃ、成績もすごく悪く」なってしまったと語る。

三つめに、S3では適応に有利な心構えや姿勢が伺えることである。例えば、同じように困難を経験しても、問題解決に至る見通しを持っている。

<S3>「自分の行動っていうか、みんなへの接し方、考え方っていうか、自分がこうしたいなって思ったら、そういう風に動いたら、うまくいかない時もあると思うけど、悩むと思うけど、・・・でもほんとになんとかありますよ。」

さらにS2、S3には、セッションで習ったスキル学習の要領自体である「他の人を観察する」「能動的に周囲の人に働きかける」を身に付けて実践している様子がある。異文化接触の態度そのものを得たともいえる。

<S2>「他の人を観察する」ことについて：「ここに来て自分がどういったらいいのかわからないことがあったときに、他の人を見て、ああこの人はこういうことを言ってるんだっていう風に。セッションって、(他の学生やネイティブのパフォーマンスを)ああやって見れたじゃないですか。だからそういうのをしているとしますね。観察、いい風に観察する・・・。こういう使いまわ

し、この人はこうしてるんだとか、今度は私こういう風にしてみようとかという風にはしてると思っていますね。・・・自分では考え出せないことも、人を見たら気づけたりするんで、そういうのを、あのセッションから学んだのかもしれないですね・・・。」

<S3>「能動的に周囲の人に働きかける」ことについて：「積極的に行く。・・・自分が前に前にプラスに考えていかないと、受身でいると・・・来てもらえないっていうか。」「できるだけ積極的に、話したことない人とかでも、話しかけるようにして、用のない、すれ違ったりしたときも、できるだけ自分から声をかけるようにして。」「部屋にこもったりせずに、一人でいたりせずに・・・みんなと・・・接する機会を、もうとりあえず常に作るようにして」「助けを求めて、知り合いになって、よく話すようになるみたいのが多い。」

S3、S6は、セッションを通じて、異文化滞在では何をどうしたらよいのかという、心理的なガイドラインを得ていたように思われる。留学後の彼らは、対人的なスキルを知っていて、それを効果的に使えたという直接的な有用性の評価に加えて、不安の低減や自信の向上においても、セッションの意義を認識していた。

<S3>「(セッションでは、アメリカへ行ったら)なんかしゃべれてなくても、とりあえず何かを伝えようとすれば、みんな受け入れてくれるっていうか、そんな感じで言ってくれて。それが、すごい、がんばろうって思ったんですよ。・・・(留学先への出発の日が)近づくにつれ、もうなんか行きたくないって思い出すくらいほんとに不安だったんですよ。」「(セッションでは)アイコンタクトとか、笑顔ではきはきとか、(スキルが)いろいろあったじゃないですか。だから、・・・接し方とかは勉強になったと思います。」

<S6>「(留学先での)最初の授業の時に、大学入って緊張してるし・・・教育実習とか言われてびっくりして。なんか(先生に)聞きに行かなきゃと思って。あの時(セッションで)ちゃんとやってきたから大丈夫だと思って、とりあえず行こうと思って行った。そういう教授との話し方、接し方とか、あと人にもものを頼む時の言い方とか、やってよかったなって。なんかやっぱり自信持って・・・言い易かったっていうか。(セッションが)なかったら行きにくかったらうなって。」

3. 総合考察

留学準備教育として我々が提供している、アメリカンソーシャルスキルの学習セッションでは、予想される適応上の困難を解決に導く捉え方(認知的スキル)ややり方(行動的スキル)を習う。練習によってパフォーマンスはうまくなり、セッション直後には留学前の不安が減り、自信が増えることが報告されている(田中・高濱,2008)。

本研究では、セッションに参加したスキル人為学習者の学生(S群)について、セッションに参加しなかった自然学習者(N群とU群)を参照しつつ、留学先におけるソーシャルスキルの使用と異文

化適応の様子を探った。質的・量的な情報の統合研究として、本人の評定と記述、語りをたどっていった。その結果、人為学習者と自然学習者とは、スキル発揮の時期という点では大きな差は見られず、初期には簡単な、中期にはやや難しいスキルが、自ずと使われるようになっていく傾向がある。ただし人為学習者では、セッションで学習したスキルを積極的に使用しようとしており、実際に現地での対人関係形成に結びつけて、対人関係を活用した適応方略を取りやすくなっているように思われる。彼らはスキル発揮の心構えを実行に移しているという意識を持っており、セッション参加が役に立ったと認識していた。つまり彼らの認識において、セッションの認知的、感情的、行動的効果が確認される。彼らが認知的・行動的にスキルの活用を進めていることは、困難に直面した際、周囲の人からのソーシャルサポートを得やすくし、問題解決への有形・無形の道をつけやすくすると推測される。対策を身に付けており、無力ではないと感じ、解決への見通しを持てることは、適応への自己効力感も向上させると考えられる。今回はソーシャルスキル教育を適用した個別のケースにおいて、一定の心理教育的な効果が示唆されたといえるだろう。人為学習者にも困難の語りは見られるし、自然学習者でも留学を楽しむ語りはある。しかし自然学習者では、対人関係の構築に行き詰まる例や、適応に費やす時間が留学期間の半分以上に渡る例や、カウンセリングに頼る例がみられた。海外滞在経験者ですら、初期には帰りたくなるほどの困難を経験している。初期の困難が全群に共通して認められるという意味では、困難は適応過程の一部といえるが、速やかに援助資源が確保できなければ、異文化不適応を増幅したり、長びかせたりする懸念がある。

従来の留学準備教育・指導は、外国語の試験対策や留学先の情報提供を中心としてきた。我々が実施するソーシャルスキル学習セッションは、心理教育的な側面に焦点を当てている。通常、学生が一度海外へ派遣されてしまうと、現地でのケアのために日本の大学ができることは少ない。留学先での異文化不適応の予防と適応の促進のためには、留学準備教育に開拓の余地が残されているように思われる。異文化間ソーシャルスキルの教育は、教育的な効果を期待しうる試みの一つとして、提案できよう。我々はこの開発を通じて、日本からの留学生の送り出しの円滑化、及び彼らの留学生活のサポートに貢献していきたい。

最後に、残された2つの課題について述べたい。第一に、今回見た人為学習者の事例は3名分にすぎない。本研究はパイロット・スタディであるため、同様のセッションを重ねて参加者数を増やし、より拡大したサンプルで、セッションの効果を検証していく必要がある。また、本研究では、本人の心理的な主観世界に注目したため、得られたデータは自己評価に基づいた限定的なデータであり、解釈であるに過ぎない。自然学習者達は人為的学習者の周囲の留学生で、似た環境で学ぶ者として注目したが、属性などは様々であった。この点で対照群としての設定が弱いことは本研究の限界であり、一般性の観点からの検証が課題と考えられる。今回は開発段階の営みを素材とする、初期的な探索であるが、群間の対比が個性によるものか、教育の影響かを完全に分離するには、息の長い取り組みを必要とする。さらにスキル不使用が、学生の能力不足によるものなのか、あるいは必要性の欠如によるものなのかなど、スキル不使用を巡る理由を詳しく探ることも課題であろう。第二

に、今回の調査対象者に対して、その後の留学生活、さらには留学終了後における調査を追加する必要がある。特に今回の人為学習群は、留学中期のサンプルを欠いている。今回の測定時点は限られたものであり、スキルの使用や適応について、より精緻な縦断研究が求められるだろう。

<注>

(1) 「スキル不使用者」には、スキルが不足して使用できなかった者、スキル使用の意欲がなかった者、当該のスキル使用以外の方略を意図的に選択した者、必要となる事態に直面しなかった者などが含まれると思われるが、今回は使用の有無に関する設問への返答をまとめたものであるため、これらの詳細を分離できていない。

(2) 語りに関するデータの分量は、A 4用紙に40字×30行で文字起こしを行った場合、次の通りである。S 2 : 15枚、S 3 : 17枚、S 6 : 15枚、N 1 : 21枚、N 2 : 19枚、N 3 : 23枚、U 1 : 13枚、U 2 : 17枚、U 4とU 5 : 13枚。

<参考文献>

Furnham, A. & Bochner, S. (1986). Culture Shock. London: Methuen.

Takahama, A., Nishimura, Y. & Tanaka, T. (2008). The influence of social skills to get social support on adolescents during study abroad: A case study on Japanese short-term exchange students. Journal of International Student Advisors and Educators.10, 69-84.

田中共子・高濱愛(2008)「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャル・スキル学習：大学での学習場面への対応を課題とした中級セッションの記録」『岡山大学文学部紀要』49, 31-48.

付記 本研究は、2008年8月2日に第13回留学生教育学会研究大会において発表した。

謝辞 本研究は、科学研究費補助金(萌芽研究19653099 代表・高濱愛)を受けた。